

バウムテストと幼児期の発達 —早期型と男女差に着目して—

小林佐知子 (静岡県立大学短期大学部)

キーワード: 幼児, 描画, バウムテスト

問題と目的

投映描画法の一つであるバウムテスト (Koch, 1949/1954) は, パーソナリティの測定ツールとして心理アセスメントの場面等で広く用いられている。描画は幼児にとって親しみやすい活動の一つであり, 言葉を用いないという利点もある。バウムテストで描かれる木は, 加齢とともに発達すると考えられており, 幼児期に特有の表現は「早期型」と呼ばれる。早期型は文化の影響を受けることがあり (中島, 2016), たとえば欧米では早期型の一つ, 「多数の木を描くこと」は, 本邦ではほとんどみられない。本研究では, 年中児である 4~5 歳児の早期型の出現率や男女差等を検討し, 本邦の幼児の描画発達における基礎的知見を提供する。

方 法

(1) 分析対象者 A 県内のこども園年中クラスに在籍する (4~5 歳) 272 名 (男児 130 名, 女児 142 名)。

(2) 手続き 調査は園で実施した。調査者が幼児に A4 サイズの画用紙を配布し, 鉛筆で木の絵を描いてもらった。バウムテストの教示には諸説あるが, 本研究では「実のなる木を一本, 描いてください。」という教示を用いた。5 名前後のグループにて実施し, 終了後に調査者が回収した。早期型の評価は, Koch (1954) の日本語版 (岸本ら, 2010) と中島 (2016) をもとに, 調査者および臨床心理学を専攻する大学院生 3 名の計 4 名に行なった。不一致がある場合は協議を行った。

結果と考察

(1) 早期型の出現率

早期型は 2 歳から 6 歳にかけてみられ, その後は加齢とともに消失する表現型である。早期型の指標の出現率は, 「一線幹 (幹が一本線)」6.3%, 「全一線枝 (幹が一本線)」8.8%, 「水平な型 (一線幹と一線枝が直交)」1.1%, 「十字型 (左右に同じ高さの水平な側枝)」2.2%, 「直線枝 (まっすぐな一本線の枝)」3.7%, 「全直行分枝 (主枝に対して分枝が直角)」0%, 「モミ型 (すべての主枝が幹の側方に向かって伸びる)」3.3%, 「日輪型・花型 (ヒマワリや花様)」2.9%, 「空間倒置 (実や葉の空間配置が不自然)」25.0%, 「幹・幹と付属の枝 (幹と樹冠が未分化)」17.3%, 「幹の中の実や葉」5.5%, 「幹上直 (幹先端が直線で閉じている)」40.8%, 「全水平枝 (枝が全て水平)」2.9%, 「一

部水平枝」4.0%, 「小さい樹冠のある長すぎる幹」16.9%, 「小さい樹冠のある短く長い幹上直」7.4%, 「暗く塗られた幹」10.3%, 「暗く塗られた枝」1.1%, 「まっすぐな根元」33.5%, 「幹下縁立 (幹の下端が用紙の下端と接する)」14.7%, 「ステレオタイプ (枝・葉などが規則的に繰り返される)」0.7%, 「多くの風景 (山や太陽などが描かれる)」2.2%, 「大きすぎる実や葉」4.0%であった。Koch (1954) の出現率と比べて全体的に低く, 幼稚園児で 40%以上出現するとされる指標のうち, 「全一線枝」「大きすぎる実や葉」「幹下縁立」については 15%未満であった。

早期型の中で最も多くみられたのは, 幹の上端が水平線で閉じられている「幹上直」, 次に根元の広がりが見られない「まっすぐな根元」, 実や葉の付き方が不自然な「空間倒置」であった。4~5 歳時点では木の捉え方がまだ図式的であり, 実や葉の空間配置が不明瞭であることが示唆される。今後は加齢に伴い, また, 学校教育等の環境的要因によって, 根元の広がりが見れる, 実・葉・枝の位置関係が適切になる等, 早期型の特徴は消失していくであろう。

(2) 男女差

それぞれの指標の男女差について χ^2 検定と Fisher の直接法を用いて調べたところ, 有意性が示されたのは「二線幹 (幹に輪郭がある)」($\chi^2=14.32^{***}$), 「幹上直」($\chi^2=13.63^{**}$), 「幹, 幹と付属の枝」($\chi^2=7.38^{**}$), 「まっすぐな根元」($\chi^2=4.79^*$), 「球形樹冠 (輪郭が円のように閉じる)」($\chi^2=6.82^{**}$), 「陰影手法の樹冠 (輪郭線がなく内部が塗りつぶされる)」($p=.024^*$), 「カール状樹冠 (カールした髪のような動きがある)」($p=.051^*$), 「小さい樹冠のある短くて太い幹上直」($\chi^2=6.74^{**}$)であった。「幹, 幹と付属の枝」は女児より男児の方が多く, それ以外の指標は女児の方が多かった。「幹, 幹と付属の枝」は未熟な表現で幹と樹冠へと分化するまでの移行過程であること, 女児の方が二線幹が多いことを踏まえると, 4~5 歳の時点で女児の方がより成熟していることが示唆される。また, 女児は男児に比べて輪郭が直線的に表現されること, 樹冠が閉じた形が多く複雑に表現する傾向があることから, 木の内部と外部の境界がより明確であり, 自己と環境との区別が進んでいる様子がうかがわれる。